

イメージと心理療法

はこ心理教育研究所 臨床心理学 亀井 敏彦

言葉を越えるものとしてのイメージ

今日は、分裂病 といっても一概にはいえない方なのですが、
ともかく非常に困難な病態にある青年の事例を中心に、
お話ししていきたいと思えます。彼は、私がこの仕事に入っ
て、ちょっと仕事ができるようになったかなという頃に来ら
れまして、それからずっとお会いし続けています。もう彼に
してみれば私は茶飲み友だちのようなものでしょう。青年と
いっても二十歳ぐらいで来られましたから、私よりちょっと
若い程度という年齢の方です。その分裂病の人のケースを油
絵を通して話していきたい、これが一例です。

もう一例は、私は五十歳を超えています。安定してきた
頃というか 角野先生も言われましたが、安定してきたとい
うのが危ないのですが、その頃のケースです。高校生のとき
発病した分裂病の患者さんで、町のクリニックの精神科医が
ずっと診ていたのですが、させられ体験があつたりして再発
が疑われました。三十歳過ぎの男性でした。彼は大学を二つ
通っていました。心理のことや哲学のことを勉強されていて、
本人自ら心理療法を受けたいということから来られました。薬

は精神科医からもらい、その一方で私が心理療法をやるとい
うかたちで五年間お会いしました。一年半はほとんど日常生活
のことを聞いていただけでした。一年半目くらいから、「先
生、自分の中のもそもぞしたどうしようもないものを形にし
てみたい」ということを自発的に言われるようになりました。
私は研究所の屋上にアトリエみたいなものを持っていました。
ですから、彼はそこへ来ていろいろな物を作りました。その
中の三点を、初公開ですが見ていただこうと思います。

三ケース目は、DV(ドメスティック・バイオレンス)の
ケースです。箱庭療法とは一体どういうものなのかというこ
とを端的に示すケースのひとつです。お父さんが妻や子供を
心理的に虐待したという事例です。身体的な虐待ではありま
せんでしたが、心理的虐待というものがいかにすごいものか
ということがわかる事例です。言葉で、「あなたはいい娘であ
る」とか、「妻は勉強しなければならぬ、私にとって家族に
とって望ましいものであるべきである」ということを、毎日
繰り返しられたらどうなるかということです。以上の三ケース
についてスライドを見てもらおうと思います。

こういう世界は言葉を越えていて、言葉で扱うことがすこ
く難しいものです。それは私の能力の問題でもありますが、
私にとって言葉は必要なものではあるけれど、イメージはそ
れを超えるものです。心理療法というのは、これまでもこれ
からも、「はじめにイメージありき」というなかで進んでいく
ものだと考えています。それにわれわれはどう関わっていく
ことができるのか、私がどんなふうに関わってきたのか、そ

うしたことをお話ししていきたいと思えます。

絵画にあらわれた内的イメージの世界

まずひとつめのケースについてお話しします。彼が私のところへ来たのは二五年前でした。彼のお兄さんが、考えていることが外へ出ていってしまうという「思考化声」だということ、最初に受診していました。お兄さんのほうには明確な診断がついていました。それで弟さんも引きこもって、眠れなくてイライラしているという状況で、兄の勤めで弟が来院しました。主治医として精神科医がいて、私は臨床心理士として担当しました。

初診で見えて、その次の週にまた外来に来ることになっていましたが、その間に自殺未遂をされました。私も非常に罪悪感を持ちましたし、精神科医も大変だぞという思いを持ったケースです。それですぐ入院をさせました。その後、一カ月でかなり落ち着いてきました。医師の診断は、「分裂病が疑われる。その可能性は高いであろう」というところでした。僕と助教授の先生と一緒に担当することになりました。その後はずっと外来通院です。外来で普通に心理テストをしたり、ちよっとした話をしたりしていました。

二十歳の頃に出会って、出会ってから四年後です。大学に私の油絵の道具があって、この人が漫画家志望であったこともあって、ちよっとこっちも山気を持って、「油絵でも描いてみない?」と言いました。そしたら、描きたいという気持ちがあると云います。自分の気持ちを描いて先生に伝えること

なら少しできると。でも何もなしでは非常に窮屈である。それで描いて来ました(口絵1)。じつとして、見るからに動きの乏しい青年だったのですが、絵を見ると上から覗いています。覗いている中に海がありまして、そこに難破船があつて傷ついた天使がいます。天使が非常に印象的でした。それから木は枯れています。次の絵は、その少し後のものです(図1)。十字架があつて、死の結晶があります。この女性が、氷だとか水晶のような、結晶した中へ入っていつて亡くなっていくという絵です。非常に寒々として、「消えていく」というイメージで描いたものです。

ここからイメージの世界の話が始まっていきます(口絵2)。四年半を過ぎた頃です。これ全体が北の森という事です。針葉樹がありまして、凍てつく惻愴な月が出ています。この家のなかに私と彼がいるという話でした。彼は自宅を描いて持って来ますから、面接では一時間くらいかけて「月があるね」、「木が生えていますね」、「ここにいますね」と言い合っ



図1 「少女の死」

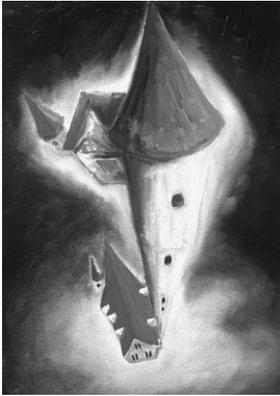


図3「地獄の不安定感」



図2「神に向かって祈る」

て終わります。ほとんど二人でこれを見ているのです。この家は少し僕にサービスしすぎじゃないかという感じがしました。実際の彼の世界はこっちの森のなかだろうなど。このツンドラの、こういう非常に冷たい森の中でどう一緒に生きていくか。そういうイメージを持ちました。

先ほどの絵から始まる「北の森の物語」と彼が名前をつけている話の続きです(図2)。少年が旅立っていくと、凍って雪が降った向こうにある神の像に出会うわけです。これは北の森で、死の旅出です。死ぬということがテーマです。雪が降って、そこで彼が白いこの塔、神の塔に向かって祈っているということ。ちょっと十字架みたいな感じになっています。

この辺で(図3)もう五、六年目くらいです。私と話をして、薬を飲んで、家にいて生活しておられるわけ

ですが、他には何もしていないわけです。それで近所のことや気になったり、同世代のことが気になったり、社会の動向が気になったり、いろいろな不安定感がある。そういう自分の不安定な気持ちを描いて表すと、こういうすごい頭でかちになる。自分は今、こういう恐怖、不安そのものであるというイメージを描いて持って来たわけです。

こういう話をしながら面接をしていると、北の森の奥から突然、このものすごく怖い男が出てきます(図4)。彼は、「これは自分だ」と言います。破壊的で、もう何をしかすかわからない。彼自身は見るからに強暴だとか、何かしそうな風体では全然ありません。前屈みで、怯えるような感じで静かに歩き、言葉もぼそぼそという人です。自分でもそういう自己イメージを持っていたのだけど、自分の中にこういう破壊的なものがあるということに気づいていきます。「これはもう、消しがたいものが自分の中にある」



図4「森の巨大スクリーンに写し出された狂気の男」

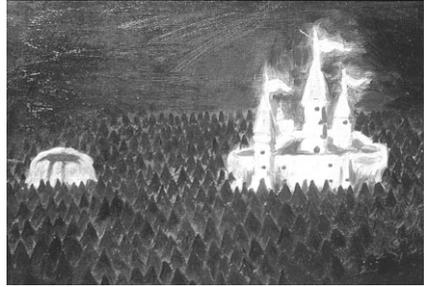


図5 「岩の砦と城、森の岩山から僕は生まれた。」



図6 「心の外と内、奥深い所にある北の森の世界」



図7 「神の国への旅だち」

と。「どうしようもないすごい恐怖だけれど、かといってそれを認めるわけにもいかない」と。こういふふうに言って持って来られました。先ほどの角野先生の話にもありましたけど、すごく重要な、内側にある破壊的なもの、そういうものに出会ったところを描いています。

これは北の森の中です(図5)。このお城は多分大病院ではないかなという感じがするのですが、よくはわかりません。その左側にあるのは、北の森にある石の砦で、「ここから僕はどうも生まれたい」と言います。そういうことがイメージ的にわかってきたと。「出生の秘密は石から」「私の母は石である」。そういうふうになっています。

「先生と話をしているのは、実際はこの北の森である」と

いうことです(図6)。現実の皆が住んでいるのはこの上層のところだけでも、僕たちはこの下層にいるのだと。今までの話はこの世界の話だといふふうには、かなり層構造的に、立体的に話してくれました。

先ほど、神の塔に祈る、跪いている少年がいましたが、これもまた死の旅に向かってる少年です(図7)。このオーロラのような場所、そちらに行くこと死の世界です。そこへ行って、ここで消えるというわけです。そういうストーリーです。「自分を失くしてしまう」「失くなってしまふ」。そういうイメージでこの頃は生きていました。

そこへついに突入していったわけです(図8)。先ほど描いたオーロラを中心です。絵には半分が描かれています。ここ

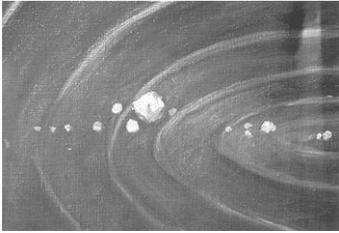


図8
「死への旅、神に跳ね返される」

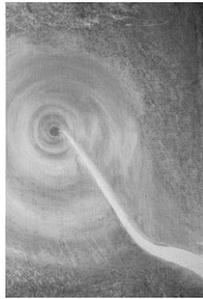


図9
「死への旅、死は望んでも
達げられない」

に入っていくわけですが、跳ね返されてしまいます。強いていえば、この中心は死の世界であるけれども、彼が物として入っていくと追い出されてしまうということのようです。自殺願望、死にたい、そういうイメージが強く働くのだけども、そうなりはしないという思いを述べています。

これが中心です(図9)。死の道があり、細かい藁のような植物があります。この中心へ行くと死が完成するわけですが、先ほどの絵と同じように中心には至らない。誰も入っていくことができないということを言っています。入りたくても入れない。でも入るときは入る。要するに、死というものには自ら望んでも得られないものである、むこうが望んだときに行ける道であろうと、そのようなことを言っています。

これは「神の光の滝とその塔」という題です(図10)。ここに神の光があつて、それが滝になって、下の北の国の森に注ぎ込んで



図10
「神の光の滝と塔。光は束となって滝の水のように魂の源に流れ落ちている」

るわけです。そしてオーロラのように全体を包んでいると。ここに山小屋があったり、母である石があったりする。こっぴつのが突如、自分の中にポツとイメージとして出てくるのです。それを記憶しておいて、これは亀井先生に伝えなくてはいけないということで、家で日夜、絵具まみれになって描いて提げて来るわけです。それで「ほー、神ですか」とか言って一時間が終わって別れる。そういうことを続けている。

僕は北の森がどんなふうになっているかということをおまわり知りません。現実的な生活はほとんどできていないし、医師も「ちよつと、お前大丈夫か」とか、「もう少し普通の生活ができるといいなあ」というような話をするもので、イメージ全体をまとめるような、俯瞰図のような物を描いてくれというのを頼んで描いてもらったものです(口絵3)。省かれて

いますが、いろいろな広い世界が、アンダーワールド、アンダーランドの中にあるわけです。

このあたりでいたい一三年ぐらいです。そのとき僕は、大学病院を急に辞めることになりました。彼と一年半くらい別れなくてはならなくなってしまうました。それである程度フローしながら別れたつもりだったのですが、この人は一年間はちゃんと通院したのですが、私と別れて一年ちょっと過ぎたときに、「もう死んでもいい」、「もう死ななくてはならないのだ」、「死の旅に出る」ということで薬を止めます。「病気が治るか治らないかは別だ」と。

薬を止めて二週間目くらいから、ものすごくハイな気分になつてきて、幻聴や幻覚が出てきたりしました。Y市の臨海公園で放浪していて、最初の絵にあるように、海に飛び込んで死のうと埠頭を歩いてた。そのとき、私の声で幻聴が聞こえてきました。「死ぬということをや精神科医にお前は相談したのか」というようなニュアンスだったそうです。彼は結構几帳面な人ですから、そのままその精神科医のところへ電話しました。その精神科医はかなり現実的で、僕と対極にあるような人ですから、現実的に「ばか者、どこをふらついておるんだ！ 明日来い、薬だ！」という感じで怒鳴つたりしています。それでタクシーに乗って帰って来てその先生に会ったら、「明日から亀井のところへ行け！」とまた怒鳴られました。僕たちの医局では、怒鳴るとい言葉は望ましい意味で使われています。一般とはちよつと違います。喝を入れるというよつな意味です。「きちんとやらなくてはいけない」と

図11
「巨人の女。魂の奥底へと流れ落ちる滝」

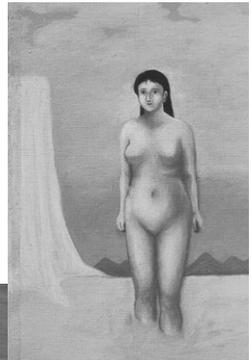


図12
「岩盤を引き裂いて誕生した巨人、青の女」

いう。そういう仕切り直しがここでありました。

幻聴 幻覚があったときに、「新しい人生」「ニュータイプ」「ニューウーマン」「新しい人たちの誕生」というような言葉が、何度も何度も聞こえてきたそうです。おとなしくて、いつもうつむいて歩いてきたような人が、胸を張って、多分独語しながら、町の中をブツブツ言いながら歩いていたらしい。本人が言っていました。それを支配していたのが、それを言わせていたのがこの女性です（口絵4）。この絵は三十号のキャンヴァスですので、私の背丈ぐらいあります。山並みがあり、海があります。この等身大ほどもある女性が、先ほどの世界を支えているわけです。いちばん基底にこれがあるというこ



図13「巨人の女に支えられる世界、1」

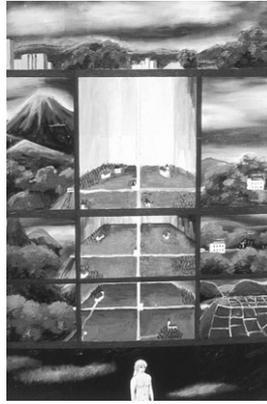


図14「巨人の女に支えられる世界、2」

とです。次の絵は、先ほどの「神の光の滝」の横に佇む巨人の女だそうです。(図11)。ここは水や光が注ぎ込んでいるところ。この巨人の女は、世界の基底でみずみずしさや豊かさをもたらしているというわけです。

彼は「石の丘から自分は生まれてきた」と言っていました。が、アンダーワールドのすごく深い世界で、ついにすごいことが起きます。「もう一人の女の巨人が、石を裂いて現われてきた」(図12)。ここで彼は静かな自分らしさというか、何か

そういう感覚が出てきたような感じがすると言いました。「でも自分は狂気の世界にいるので、こういうことは多分亀井先生しかわかってくれないだろう」とも言っていました。これも三十号くらいのキャンヴァスに描かれています。

あまりにもす

ごい奴が出てきたり、葉が少しですむようになつたりなど、いろんなことが起こって、時々僕も不安になつてくるものから、また俯瞰図を描いてもらいました(口絵5)。この上層は普通の世界です。垂直に一本の筋が通っています。ここは一層、二層、三層、四層構造くらいになっています。そして深まつたり、どんどん広がつてきたり、付け加えてきたりして、この層が増えてきます(図13)。上部にはわれわれが住んでいる世界があり、いちばん底には先ほどの女性がいます。彼が幼児期にイメージしたような世界もここにあるかなというようなことを言っていました。

これも同じようなもので、いろいろ向きを変えて描いています(図14)。「こちら辺になるとかなり落ち着いてきて、歳も四十歳くらいになつてきます。僕は開業しているんですが、入り口を入つてくるとお金を払わないといけないような雰囲気になっていて、普通の病院の外来とはちよつと雰囲気違います。この頃は、「先生、金がないで、たばこ銭だけ置かしてください」という関係になっていて、「次もらうよ」とか、「絵の具代でやらにしよう」とかいう話をしていている頃です。

これが数年前、最後の作品です(口絵6)。今見せたのは二十枚くらいでしたけど、これはほんの一部です。この人の描いた作品は百何点あります。今も僕の家の上層半の部屋いっぱいにあります。だからそれをわかりやすいようにセレクトションしてきました。これは海です。何事もここで始まり、これで終わると。感激しました。空と海、水平線、彼方。こういうビューポイントが出てきました。前はずっと下へ行つてい

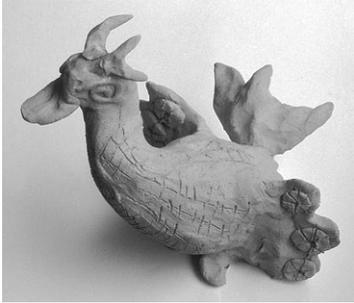


図16「不死鳥」



図15「不思議でグロテスクな賊」

破壊的なものを形にする

ました。「水平線で、先生とこちら辺で出会っているのじゃないか」というから、「そうでしょうね」と、わかったようなわからないような話をお互いに行っています。

これは先ほどいった、三十歳過ぎた分裂病の青年が粘土で作ったものです。人の顔がたくさん彫られています(図15)。これは「凶暴なシャチ」と

いう題がついています。こういう造形や粘土の扱いは僕がやるものですが、そのことを話すと、勘がいい彼は「ぱつと」「こつと」荒々しいものがあるのです」とか言いながら作りました。これは面接して四年後くらいです。ぱつと会ってぱつと作ったものではないです。

これは不死鳥です(図16)。手塚治虫の『火の鳥』とか、そういうものにヒントも得ているようです。この人は「自分は

再生したい」「人生を全うしたい」と言って自殺未遂をして、精神科医のもとで何とか自分をコントロールしながら生きている。しかしやはり「お前はだめだ」、「最低の人間だ」と誹謗中傷する幻聴がある。それで彼は学問を

ものすこく一生懸命やるのです。でもそれでも満足できない。それでは幻聴と闘えないので、僕

のところに来られました。それでこつこつものを作る。ちよつと身をよじっているとこゝろなんか彼そっくりです。ちよつとわれわれと身体感覚が違っています。ここに車輪が付いています。曼荼羅的なものが付いています。

これが最後に作ったものです(図17)。かなり大きいものです。粘土の塊です。彼がこつこつ言いました。「ほつとしました。出るものが出ました。これだったんです。こいつがいたんです」と。人の顔が付いています。鶴(ぬえ)のような顔をした動物が二匹、彼はこれを「ウロボロス(uruboros)・・・自分の尾を噛む蛇や竜のイメーシ」と言っています。本を読んでいきますのでいろいろな言葉を知っているわけです。二頭の、蛇なのか狸なのか狐なのか、爬虫類や哺乳類すべてが合体したようなものです。後ろには羽根が付いています。飛行機の左翼、右翼で後ろにも羽根が付いています。裏表があつて、す



図17 魂を形作る「ウロボロス」



図18 魂を置く「怪獣と人間の戦闘」

ごくギザギザになっているところがあり、棘もあります。そして真中に蛇がぐるぐる。 こういうイメージです。これですごく身が軽くなってきたということでした。破壊的なものというか、そういうものを外へ形にして取り出すことができた。「これを先生に預かっていて欲しい」と。前のケースも絵を預かっていて欲しいというふうに言われるし、これも「預かっていて欲しい」ということなので大事に預かっています。

DVと箱庭療法 破壊された町と祈り

これは女の子で、DV（ドメスティック・バイオレンス）

のケースです(図18)。姉妹で作っています。これはどう見ても女の子の作品だとは思えませんが、三年生と六年生の姉妹です。お父さんは、今の言葉でいうと三高高学歴、高収入、高地位。それどころか六高ぐらいある人だと思えます。その人が望ましいことをすべて、娘と妻に押しつけるというかた



図19「イメージの根。箱庭の基盤に置かれた混乱と祈りの世界」

ちで心理的に虐待しました。そんななかで、いろいろな勉強をされて、離婚することを決意をされて、私のところに弁護士で紹介で飛び込んで来られたケースです。単純に誰がどうかということではなく、ここにはものすごい力が動いている。また、それに拮抗する力がある。いかんともし難いものです。きちんと枠の中に入っているようだけど、これが今の箱の下です(図19)。前の分裂病のケースでも、こういう多層的な世界という系列がありました。箱の下の台を支えている柱というか、桁ですが、その下にマリアがあります。町を破壊するように地雷があつたり、蛇がいたりして、ここも混乱しています。

これも箱の外ですが、警察の力も機能していなくてひっく



図20「箱枠を出て、床面での表現。無力感と祈り」

り返っています(図20)。この箱庭でだいたいい中盤です。棚をひっくり返すくらいの大騒動をやっています、六畳くらいの部屋がぐしゃぐしゃです。そういう「争い」があって、それから「祈り」が登場して、その後はすごく穏やかな海ですとか、祈りの場面に推移していきます。

イメージの根

分裂病からDVまで話してきましたけれども、人間の内側にはわれわれが話をしたり、こういうことだねと言っているこの外の世界以上に、広大な内的世界が当然あるわけです。これを無視することは、しようとしたってできない。そういうものにわれわれはどんなふうにつき合っていくか。そういうイメージの始まりの根っここのところというか、こういうイ

メージが出てくるところ、そこに二十一世紀というのは注目していくべきだし、そこにこそ活路があるのではないかなと思います。そのイメージの根っここのところでは、芸術や宗教や文化というものが見事にクロスしているのではないだろうかと思えます。私は臨床心理士ですけれども、前の二つのケースは医師との連携が、DVのケースは弁護士との協力がものすごく重要でした。そういう根っここのところを他の領域の専門家とも連携しながら、イメージを中心とした心理療法をこれから何とかが続けていきたいなと思っています。